

第四十九回香川菊池寛賞受賞作品

光りの地図

渡邊 久美子

十二時の時報とともに電話のベルが鳴る。日付が変わろうとする夜中に、電話をかけてくる非常識さに腹を立てながら、敏男は腰を上げた。今夜で五日目だ。

「あなた、お母さんから」

妻の浩子は最初こそいいいな口調で敏男に取りついでいたが、今は受話器を取るのさえ大儀そうに受話器を見た。

「ボクが出る」

敏男は眠い目をこすりながら、母マサのたわいもない話に今夜も付き合わされるのかと思うと、受話器に伸びた手がかじかんだように動かなかった。

「はい、篠田です」

声は沈んでいた。それでも自身の母だと思ふことで声を絞り出そうとした。

「敏男かい？ 久しぶりだね。元気で暮らしている？」

声だけ聴くとまるで若い女のトーンで、気分が高揚しているようだった。

夜中に電話をかけてくることはこれまでに一度もなかったし、夜毎の電話で「久しぶりだね」の挨拶もおかしいと思えた。

話の内容も昨夜と変わらない。

朝ごはんは何を食べ、昼食には、夕食にはと作り方から始まって残り物のおかずまで、細かく自分のことばかりを話す。

敏男が「うん、うん」と相槌をうつ横で、浩子が手真似で（先に寝るよ）と寝室の方を指差した。

十二時過ぎの三十分、四十分の電話は苦痛だった。話を聞きながらも明日の仕事の段取りを頭のどこかで考え、マサの話が途切れることだけを願っていた。

そして、認知症という言葉が敏男の頭の中をぐるぐる回っていた。

父親は敏男が三歳の時に病気で亡くなった。母は一人息子である敏男を、教員をしながら育て、大学まで行かせた。一人暮らしになる母を気にしながらも実家から離れた町で就職をした。

敏男が就職した時、マサは現役でまだ教壇に立っていた。

「学校が辞めると言うまで働くよ。元気だからね」

しつかり者のマサは六十歳で定年を迎えた後も、居残り学童教室の責任者として十年間を勤めた。

敏男には自慢の母親だった。

いつもはつらつとしていた。働き者で明るくどんな時も前向きで、母の愚痴を聞いたことがない。

夫がいないマサにとつて息子敏男との暮らしは並たいていのことではなかったと思う。経済面でのこと、仕事をしながらの家事や近所の人たちとの付き合い、亡くなった夫の親類縁者とも、未だに義理を欠かさない。

人に迷惑をかけない、不義理をしない、常に前へと進む、明るく落ち込まない。

一緒に暮らした十八年の間で母に教えられた教訓のようなものを敏男はしつかりとわかっていた。

反面、父親のことは多くを語らなかつた。成長することに疑問に感じた思いを母に尋ねてみたが、母の答えはいつも同じだった。

敏男が幼い時は「父さんはお腹が痛くてね、それがもとで亡くなったの」と言い、そんな答えで納得しない年頃になると「父さんは内臓を患ってね、十分に治療はしたのだけれど手遅れだったのよ」と、具体的な病名や経緯を話すことはしなかつた。

それ以上問うことはきつと母に苦痛を与えることだと感じ、それ以来尋ねなかつた。

死んでしまった人は戻らない。自分を納得させるためだけに夫を思い出させ母を悲しませることはやめよう、敏男は、ある時そう決めた。

仏壇に置かれてある、若くてハンサムな写真の父親が時々夢の中に出てくることがある。

四季の花がいつせいに咲き乱れているどこか知らない場所で、両親と幼い自分が豪華な弁当を食べている。

「きれいなお花畑ね。おいしいお弁当だね」

若くてきれいな母がそれぞれの小皿にごちそうを取り分けて差し出す。白くて華奢な母の手とその仕草を父は黙って見ている。顔は笑っているように見えるが目には涙があふれている。

涙を流す父を見た時、敏男は谷底へ突き落されたような気分になる。

(なぜ、父は泣いているのだろうか。こんなに美しい花畑で、こんなにおいしいお弁当を食べているのに、なぜ泣いているのだろうか。何が悲しいのだろうか)

父の顔を見て幼い敏男も悲しくなる。心の底から辛くなって「ウエーン」という大声を出して泣いた途端に目が覚める。いつも同じ夢を見て、同じ場面で泣き、自分の泣き声に驚いて目を覚ます。

枕が冷たく感じるほど濡れている。

不思議な夢だ。

横で眠る妻はいつも言う。

「うなされていたら起こそうか？」

「いや、いい」

その夢を途中で遮られることは、唯一父との接点を断ち切られるようで切なかった。うなされていても幸せなひと時なのだ。

そして不思議なことに父の声を一度も聞いたことがない。笑っているのに涙を流す父の顔。若くて美しい妻と幼い子を残してこの世を去った無念なのか悔しきなのか、敏男にはわからない。

父が亡くなった年を越えてもまだ心の中に冷たくひっそりとした闇がある。その闇が何なのか、同じような夢が何度も何度も繰り返される意味があるのか、深く暗い闇は広がるばかりだった。

夜中のマサの電話は十日が過ぎても続いた。

「敏男の元氣そうな声を聞いて安心したよ。もう、しばらくはかけないからね」と最後に言う。が、次の晩もまた「久しぶりだね……」と何年も話していないふうに切り出す。

敏男には母を一人にさせている負い目があった。就職を決める時点で母の元へ帰ろうと思っていたが、大学を卒業したこの町で実力以上の会社に採用されて帰ることを断念した。

そして浩子と出会い結婚をした。たまたま会社と浩子の実家とが近距離であったために、浩子の両親と同居をすることになった。

浩子は一人娘、息子がいないせいか義父は実の息子のように接してくれた。父親のいない敏男に本当の父と思えるほどかわいがってもらった。

長男拓郎が生まれ、続いて長女亜美が誕生した。波風のない月日が流れた。

十年前に義父が肺がんで、一年近くの闘病の末に亡くなった。今は義母のキクエと妻と大学生になる亜美との四人暮らしだ。拓郎は就職を期に一人暮らしを始めた。

敏男たちが住むこの土地もずいぶん変わった。義父が亡くなった十年くらい前から、周囲には大型店舗が進出しはじめ、おしゃれな今風の家が建つようになった。

結婚した頃は田園の中に古い日本家屋がぼつりぼつりとある程度だったが、田んぼは住宅地になり高層マンションになった。

敏男は昔からの落ち着いた大屋根のこの家が気に入っていた。妻と義母が古い家を壊して建て直そうかと言うが「ボクはこの家、好きだなあ」と、反対とも賛成ともつかない返事をしていった。

さすがに水回りは古くて不便だったのか一階はリフォームをして畳からフローリングに変え、和洋折衷の住まいになった。

「二階のパパの部屋もリフォームすればよかったのに」
亜美が敏男の部屋へ上がってきては言う。

「パパはこの黒くて太くてどっしりとした梁が気に入っているんだよ」

天井を見上げるたびに思う。百年も前に建てた当時の家主が、木材を選びこだわったこの家を代々の男たちが引き継いでいく。

義父の親、義父、血はつながらないが、拓郎までのつなぎは敏男、愛着を持って住み続けるのもまた何かの縁だと思っていた。

そう思う反面、年々母のことも気になっていった。七十九歳で一人暮らし。何でもできるといつても年には勝てないだろう。

浩子の母も七十六歳。娘も孫も身近にいる。浩子が運転する車で女性三人が近くのショッピングセンターへ出かける時の楽しそうな表情は何ともほほえましい。

「パパも行こうよ」

妻もキクエも亜美も誘ってくれるが三度に二度は断る。

「途中になっている仕事を片付けるよ」とか「読みたい本があるから」と留守番を引き受ける。笑顔の三人を、二階の窓から手を振り見送る時、母のマサはあんなに嬉しそうな顔をする。はあるのだろうか、だれかに向けて手を振り「行ってくるね」と留守宅を気にせずに出かけることがあるのだろうかと思うと、何とも言えない気持ちになる。

強く生きなければいけない。泣き言など言ってはいられない。頼る人はだれもない、信じられるのは自分だけ、と何十年も自分自身に言い聞かせて生きてきたに違いない。

七十歳を過ぎた頃から会うたびに身体が小さくなってきているような気がする。気負いと言う力力が、風船の空気が抜けしぼんでいくように、肉体もそして脳も衰え老化が進んでいるのかもしれない。

その夜、マサのことに口火を切ったのは義母のキクエだった。

「敏男さん、お母さんのこと心配だね。浩子とも話したのだけど、良かったらこの家に来てもらっても私たちはかまわないのよ」

鳥のから揚げに箸を伸ばしながら亜美も言う。

「使っていない部屋もあるし、にぎやかになっていないじゃない」

浩子は何も言わずに、キクエの話にも亜美の話にも小さくうなずいていた。

年寄りが一人でも増えると負担は浩子にかかる。敏男の手前あからさまに「いや」とは言えないだろうが、もろ手をあげて賛成するとも思えなかった。

「みんなの気持ちは嬉しいけど、少し考えてみます」

敏男はそう言ったものの、マサの身に良くないことが起こらないうちに何らかの結論を出さなくてはいけないだろうと思っていた。

とりあえず土、日曜の休みを利用してマサのようすを見に帰ることにした。

浩子も一緒に行こうかと言ったが、男の敏男なら身軽に動けるからと一人で帰省することにした。

「おばあちゃんによろしく、ね。亜美はおばあちゃんがこの家に来ること、大歓迎よ、って伝えよ」

「気をつけてね。手伝えることがあったら私も行きますから連絡して下さい」

妻も義母も、婿養子に入った形の敏男に気を遣い、良くしてくれる。

母子家庭で育った敏男の家ではあまり笑うことがなかった。時々母が思い出したようにおどけて笑わせることもあったが、常に何かを考えているような硬い表情が多かった。

明るい浩子がどこか影のある敏男に、暗い敏男が明るい浩子に引かれたのも、正反対のものに憧れる感情があったのかもしれない。

新幹線でも在来線の車中でも、記憶にある取り留めのない過去のことを思い出していた。

母に会える喜びとは逆に、待ち受けている何かに不安を抱いていた。

大丈夫、母に会えば不安は消える。昔のしつかり者の母がいる、心配はない。そればかりを念じていた。

待ち時間を入れて約五時間で実家に着いた。

安普請ながらも田舎の家。南側には狭い庭があり、花好きの母はよく季節の花や野菜を植えていた。手入れが行き届いた玄関先には鉢植えのトネリコが緑の葉を伸ばし、踏み石に水がま

かれていた。入り口の柱の一輪挿しには可憐な野の花が活けてあった。

以前に帰省した時の、母の優しさが溢れる家のようなすを何の疑いもなく想像して角を曲がった。

曲がった途端、敏男は手にしていたポストンバッグを取り落としそうになった。その時の自分の表情は容易に想像できた。

ぽかんと口をあげ、目は一点を凝視し、どこか違う通りの角を曲がったのかと勘違いするほどの戸惑いと衝撃を受けた。

「い、これは……」

次の言葉が出てこない。

以前の家の面影はなく、ただ「篠田」の表札だけが蜘蛛の巣の奥に薄ぼんやりと見えていた。確かに実家だ。玄関を前に何秒、いや何分立ち尽くしていただろう。

敏男の後ろ側を近所の人が行き交う。軽く頭を下げて気の毒そうに、そして迷惑そうな顔で通り過ぎる気配を感じながら、挨拶を返すことさえできないでいた。

「かあさん」

玄関の引き戸にたどり着くまでも、どこから集めて来たのか、ゴミとしか思えない雑多なものが山と積まれていた。

敏男は足元に絡まりつくゴミを取り除きながら、玄関戸に手をかけた。

一瞬、母は生きているのだろうかという思いがよぎったが、夕べ遅くにかかってきた電話の声を思い出して打ち消した。

「かあさん！」

家に入った玄関の三和土も上り口の板の間も見えないほど、膨らんだゴミ袋で覆われていた。

この家で母はいつたいたいどうやって暮らしているのか、母はここに住んでいるのか。

母の姿を探していると奥から声がした。

「どなたでしようか？」

きよとんとした表情の母の姿はまるで老婆のように見えた。

敏男の顔を見ても息子だとわからない。

「何か用事ですか？」

話のつじつまも合っていない。昨夜の電話で「明日はかあさんに会いに帰るからね」と言ったばかりなのに、息子の顔も認識できなくなっているとは想像もつかなかった。

敷きっぱなしのふとんの上にもちよこんと座り、にこにこ笑っている姿もまた普通ではなかった。

前は白髪ながらも短くカットして、身に着ける洋服も清潔を保っていた。目の前の母の髪は、肩のあたりを白い霞のようにふわふわと漂い、何本かの白髪が頬や口の周りにへばりついてい

る。それらを気持ち悪いとも感じないのか、へらへらと笑っている。

薄汚れた衣類、どす黒い皮膚の顔や手足。敏男は啞然とするだけで何と声をかければいいのか

さえ戸惑っていた。

何とかしなければ、この家も母も。

まず浩子に電話をかけた。あまり心配をかけたくなかったので大げさに言うのはやめた。「予定の二日では帰れそうにないので、後二日ほど滞在するよ。母は元気だけど、軽い認知症の

ようなので月曜には病院に連れて行くよ。会社はこちらから連絡を入れる。そちらのことはよろしく頼む」

浩子は「何かあったら電話をして」と言っ

て電話を切った。

浩子や家族に迷惑をかけたくな

とにかくこの家の大量のゴミを何とかしなければ、血が繋がった唯一の肉親がこの状態を改善しなければ、とそればかりを考えていた。

まず母の居場所を確保するために居間の片づけに取りかかった。敷きっぱなしのふとんや周囲のゴミを取り除いた。掃除機をかけようとして昼前になっていることに気づいた。

十二時少し前に玄関ベルが鳴った。

誰だろう？ と戸を開けるとエプロンをした中年の女性が「遅くなりました。お弁当です」と包みを差し出した。ずしりと重かった。

「あらっ、どなたかしら」

「この家の息子です。お世話になります」

敏男は恐縮しながら頭を下げ、いたる所に散らばっている「寿弁当」と書かれた同じ包みを受け取った。

「昼食と夕食の二食分ですから一度に食べないように伝えて下さい。お願いします」

敏男が怪訝な顔を見ると女性はそれを察したのか付け加えた。

「よくあるですよ。二食を一度に食べられて、夜の分がまだ届かない、ってお電話があるものですから」

女性はマサがそうだとはいわなかった。年寄りを相手に仕事をしていると、自然に物腰が柔らかい口調や態度になるのかと感心した。

「それにしても大変ですね。少し前はうちも庭もご本人もこぎれいにしていらしたのですよ」

「すみません」

玄関の戸を開けるまでの通路も通りにくかっただろうと思うと、心から申し訳なく思った。

「でも、おばあちゃん、お元気で何よりです」

笑顔のまま帰って行った。

片づけが十分でない上り框に立ったまま、敏男は深々と一礼をした。

だれが宅配弁当を申し込んだのか、この弁当のおかげで母は生きられているのだと思うと、女性の後姿が神様のように輝いて見えた。

二食の弁当のおかげで二人は昼食を食べることができた。

ゆつくりと休む暇もなく、古いソファを日当たりのいい庭に向けて置き、母を座らせた。風呂場とトイレを掃除して母を風呂に入れた。

「お昼から風呂に入るのかい。人さまに入れてもらうなんて恥ずかしいよ」

正気なのかそうでないのかよく分からない会話が続く。戸惑って母の顔を見るがたいはいはにここにこと笑っている。

母が楽な格好でシャンプーをする。いつから髪を洗っていないのか、二度洗いをしてあまり

泡立たない。同じようにして三度洗いリンスをすると、さわやかな女性らしい香りが風呂場に広がった。

「顔は自分で洗うよ。ごしごし擦ると角質がとれてしまうから」

若い頃から気にかけていたららしい女性特有の心がけがこんな場面で正気の顔を現わす。

「敏男はお風呂が嫌いだねえ」

「そうだったの」

「ちようどいいよ。かあさんがあんたの背中を流してあげる」

マサの中では今、母親と息子になっている。

「ボクは後で入るからいいよ」

母は頷いた。椅子に座らせ丸くなった背中を流していると、生温かいものが頬を伝わった。

シャワーの湯かと思っただが、目と鼻の奥を何かできつく摘ままれたような痛みを感じたので涙だとわかった。

そして、それはそのまま心の奥の痛みでもあった。

「かあさん、ごめんな」

「何か言ったかい？」

掃除したての風呂場で母と息子の会話が響く。昔、二人だけで慎ましく幸せに暮らしていた

あの頃と同じ湯気が満ちていた。

二階は無事だった。ゴミらしきものはひとつもなく散らかっていなくなった。押入れの中のとんには清潔なカバーがかかっけていて、夏用冬用とも、すぐに使える状態だった。

「助かった」

敏男は思わず口にした。

今夜は母と二人、二階で寝よう。

近くのコンビニで二人分の夕食を買い、五〇〇ミリの缶ビールも一本買った。

十分に片づいてはいないものの居間に丸い飯台を出した。物持ちがいい母は、昔から飯台として使っていたちやぶ台をそのまま使用していたのだろう。塗りこそ剥けているもののしっかりしている。

小さなコップに少しだけ、母にビールを注いだ。

「あら、今日は何のお祝いだい？」

「家が少しだけ片づいたお祝い。それと、かあさんがお風呂に入ったお祝い」

自分のコップにビールを入れて母のコップに近づけた。

「そんなお祝いがあるのかい。おもしろいね、楽しいね」

にこにこ笑いながら、コンビニで買った幕の内弁当の卵焼きとオレンジを敏男の弁当のご飯

の上に乗せた。

「敏男が好きなものとかあさんが嫌いなもの、だからあげる」

昔からそう言つて必ず敏男にくれた。決して嫌いではなかったはずなのに、いつもそうした。

幼い敏男は「何でも食べなきやダメだよ、つて先生が言うよ」と言いながら「かあさんが嫌い

ならボクが食べてあげる。もつたいないからね」と、嬉しそうに口に入れた。

嫌いだからというのはきつと母の愛情だったのだろう。

それは未だに忘れない癖のまま、マサの心のひだに沁みついていった。

二日目も片づけに明け暮れた。膨らんだゴミ袋が、ぎつしり詰め込まれた過去の出来事のひとつひとつのように、積み上げられていった。

家中のゴミ、庭のゴミ、玄関先のゴミ。道行く人が「ご苦労様です」と会釈をしながらの表情は、安堵の苦笑いが含まれているようにも見えた。

知らなかったとはいえ迷惑をかけたであろうことを詫び、頭を下げた。

三日間、敏男は休まず動いた。さすがに疲れがきた。普段、したことがない掃除や洗濯は、しなれている女の人よりも手際も悪いし時間がかかる。それでも何とか人が住める部屋になった。

マサの夜具を一階のトイレに近い部屋に移すと、マサが一人で暮らすこれからのことを考えた。家族はマサとの同居をすすめてくれたが、今の状態の母を、環境が違う場所へ移して良いものかどうかの思案をした。

正気と思える時もある。会話も成立している。これから認知が進むことは目に見えていた。だけれか世話をしてくれる人があれば、この家で暮らすことがいいことだけはわかっていった。

だが、一人で生活することは不可能に近い。ゴミならまだしも、もし火でも出したらと思うと、敏男は身震いがした。

「かあさん、ボクは帰るけど大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。今までだつてずっと一人でやってきたのだから、何の心配もいらぬよ」
食べるものは毎日配達してくれる。

「火は使わないですよ。蚊取り線香もつけてはダメだよ」

そう言つてマッチやライターはマサの手が届かない高い所に置き、ガスコンロは元栓を閉めた。介護老人ホームへの入所などあらゆる選択肢を考え、結論を早く出した方がいい、いや出さなければいけない状態になっている。家族と相談することも当然なのだが、最終的に決めるのは敏男自身だということも十分わかつていた。

帰りの車中、マサの屈託のない笑顔と手が付けられなかった家中のゴミの山を思い出して

土日を含めて四日間休んで出社した机の上の未処理箱には、部長としての敏男の決済印を待つ書類が盛り上がっていた。たとえ年次休暇でさえしわ寄せは後にくる。日々書類に目を通し、決済できるものとそうでないものとを区別し押印する。

時には現場に足を運び、内容を確認する。特に経費が多くかかる事案には慎重に対処しなければいけない。今はどこの会社も少額からの節約を努める時代なのだ。

「部長、お母様の具合はいかがでしたか？」

事務員に声をかけられて仕事とプライベートとの思いがないまぜになった脳が覚醒した。

「体調を崩したというので見に帰ったけど意外と元氣そうで安心したよ。休んでいる間、迷惑をかけたな」

「それはよかったです。あ、おみやげありがとうございます。皆でいただきます」

母のことで頭が一杯だったのでお土産を買うことをすっかり忘れていた。駅に着いてあわてて田舎の菓子を探すのに焦ったことを思い出した。

「いや、そんなもので」

敏男は苦笑した。そして母の症状を隠してしまったことが母に対して後ろめたく悪い気がした。

いつもより長い勤務時間を終えて、凝りを感じた肩を回しながら社屋を出ると小雨が降っていた。夏が来る前の独特の蒸し暑さがあつたが、小雨が幾分それを押えていた。全身にかかるミストのような細かい雨は、敏男の混乱した考えを落ち着かせる役目をした。

会社、家庭、母、経済面、何を優先して重きをおけばいいのか、妻や義母や子供たちの意見もあるだろう。が、肝心のマサの思いを尋ねることができない悲しさがあつた。

母さん、あなたは一体どうしたいの？ ボクへの迷惑とか負担とかを度外視した思いを答えて欲しいのだけど、それは無理だろう。

あれこれ思うだけで方向が定まらず、行きつ戻りつの思考が、絡まりもつれた糸のようになくけそうになかった。

会社を辞めてもいい、母と暮らしてもいいと思うようになったのは、家族との話し合いの後だった。

長男の拓郎は「将来は父さんがこの家を継いで後は僕が継ぐ。その大まかなことさえ決めておけば、それまでの間はみんなができるだけ幸せなように進めていけばいいのじゃあない」と言った。

男らしい大胆さだ。細かい決め事は重要ではなく、その都度決めればいいと言う。

長女の亜美は「私は後一年大学が残っているからその費用さえ。パパが用意してくれたら、

就職浪人はしないで働くわ。大学だけはどうしても卒業したいの」と言う。当然だ。

義母は「私は元氣だから食べる野菜ぐらいは畑で作るよ。戦争で辛い目はさんざんしたから少々の貧乏には耐えられるよ。敏男さん、あんたが頼りだから拓郎が言うように、いつの日にか、この家と土地を守ってくれたら、死んだ父さんも文句は言わないだろうよ」

ゆつくりと話すキクエの目には涙がにじんでいるようにも見えた。

心強かったのは浩子の言葉だった。敏男が実家に戻りマサの介護をすることに反対すると思っていたからだ。

「本当は嫁である私がお母さんの面倒を看なければいけない立場なのに、それをあなたに押し付ける格好になるのはとても心苦しい。だけどあなたがお母さんとの同居を望むのならその方がきつと一番良い方法なのだと思う。お母さんにとっても、あなたにとっても」

何かあった時に、とは言わなかったが、その時に、こうもしてあげれば良かったこんなこともしてあげれば、という後悔も心残りもないように、という意味が込められていたと思う。

「お金なんかどうにかなるわ。これまでの蓄えも少々あるし、底を尽きそうになったらパートでも探すから心配しないで」

浩子と拓郎の大らかさは遺伝かもしれない。小心な自分に似ていないことに感謝した。

心が決まると実行に移すのは早い方がいい。マサの、あの状態での一人暮らしはたとえ一日でも避けたい。

仕事の引き継ぎには少なくとも一カ月はかかるだろうが、実家と会社の行き来で何とかこなせる予定をたてた。今はファックスもパソコンでのメールも使える。自分は会社にとってなくてはならない存在だと思っても、突然病気になる人も亡くなることさえある。それでも多少の支障こそあれ動いて行く。社会の小さな歯車がひとつ欠けても世間は何ら変わらない。

会社に対しては申し訳ない思いや残念な気もしたが、反面、ほっとした気持ちもあった。

急な退職の申し出に上司は、介護休暇をとってしばらくようすをみたら、と言ってくれたが、敏男の意志が固いことがわかると快く受理してくれた。

「いつか、戻る日を待っているから」
ありがたい言葉だった。

退職金は思いのほかの金額だった。大学を卒業して三十年あまり、年金の支給までには十年あるが、何とか暮らしていけるめどは着く。実家での生活が落ち着いたら、これまでの仕事の経験を生かしてアルバイトでも始められたら少しでも収入が得られる。

長年教師をしていたマサの年金を当てにしているわけではないが、敏男に収入がなくても実家での生活費は余るだけある。

退職金のほんの一部を引き出し、浩子に敏男名義の銀行の通帳を渡した。

日常に必要な衣類や身の回りの物をスーツケースに詰めた。

「足りないものはその都度宅配便で送るけど、時々は顔を見せて下さいね」

浩子はいつの間に用意をしていたのか封筒に入った現金を敏男に渡した。封筒の厚みから察すると百万円、いやそれ以上入っているかもしれない。当座の生活費を心配したのだろう。

「いや、こんなには」と言ったが、普段から余分なお金を使わない敏男の性格を知っての心遣いと思い受け取った。

「食べるものは節約しないで。健康が一番だから」

「わかった」

昼過ぎには実家に着くように朝のラッシュ前に電車に乗った。

ホームに残る浩子の笑顔が少しべそをかいているようにも見えた。

先がまったく見えないマサの介護の不安が敏男の目にそう映ったのかもしれない。自分も同じ表情で妻を見ていたかもしれない。

亜美が辛そうに「おばあちゃんは大好きだけど家族がバラバラになるのはいやだ」と言っ泣いたことを思い出していた。

家に着いたのは昼を過ぎていた。大きな荷物を持った敏男を見るとマサは目を見開いて言った。

「あら、どちらさまかしら。年恰好は息子に似ているけど」

相変わらず食べ終えたポリ容器が居間に散乱していた。飲み残しのペットボトルが転がり、着替えた洋服がベッドの手すりに幾重にも重なっていた。前ほどの散らかりようではなかったことにほっとした。

マサの生活はさほど変わってはいなかったが、認知は進んでいた。

敏男が「かあさん」と呼んでも息子と他人との区別がつかなくなっていた。それでもどこか息子と似ていることに安心したのか、怯えることも警戒することもなく家へと招き入れた。

敏男が穏やかな声で「お世話にきましたよ」と言う。「それはご苦労さま。よろしくお願います」と三つ指をついておじぎをした。

敏男は笑うしかなかった。

笑いながら涙が出た。

「かあさん、ボクだよ、敏男だよ。顔を忘れたの？」と迫っても混乱させるだけ。今日からは

「お世話をする人」でいい。母さんのそばで暮らせるだけでいい。敏男は顔を伝う汗とも涙ともつかない滴を拭うこともせず、散らかったゴミを寄せ集めた。

以前来た時の掃除の効き目がまだあってゴミの量は多くはなかった。風呂場はあれから一度も

使^{つか}つていないのか、タイルがくすみカビの匂^{にお}いがした。

家^{いえ}中の窓^{まど}を開^あけ放^{はな}ち空^{くう}気^きの入^いれ替^かえもした。老^{ろう}人^{じん}特^{とく}有^{ゆう}の体^{たい}臭^{しゆう}とたまつたゴミの匂^{にお}いを、ほんの少^{すこ}し冷^{れい}気^きを含^{ふく}んだ初^{しよ}夏^かの風^{かぜ}が、ど^{どこ}か遠^とくへ運^{はこ}んでいった。

マサを風^{ふう}呂^ろに入^いれ、洗^{せん}濯^{たく}をした下^{した}着^ぎと洋^{よう}服^{ふく}に着^き替^かえさせると近^{ちか}くの商^{しょう}店^{てん}街^{がい}へ夕^{ゆう}食^{しょく}の買^かい物^{もの}に出^でた。材^{ざい}料^{りょう}を買^かつて作^{つく}ることも考^{かん}えたがいざとなると何^{なに}が作^{つく}れるのか思^{おも}い出^だせなかつた。

同^{どう}居^{きよ}の一日^{いちにち}目^めから勢^{いきお}い込^こんでも無^む理^りなことが分^わかつたので、す^{すぐ}に食^たべられる惣^{そう}菜^{ざい}を売^うつてい^いる店^{みせ}で母^{はは}が好^すきそうなお^{えら}かずを選^{えら}んだ。

以^い前^{ぜん}と同^{おな}じように「寿^{ことぶき}弁^{べん}当^{とう}」は断^{ことわ}らず昼^{ちゆう}食^{しょく}に二^{ふた}人^{たり}が食^たべれば作^{つく}るのは朝^{ちよう}食^{しょく}と夕^{ゆう}食^{しょく}だけですむ。一^{いつ}食^{しょく}のお^おかずも作^{つく}れないのに三^{さん}食^{しょく}分^{ぶん}は考^{かん}えただけでも気^きが重^{おも}くなる。

掃^{そう}除^じ洗^{せん}濯^{たく}三^{さん}度^どの食^{しょく}事^じの用^{よう}意^い、これ^{これ}まであ^あまりか^かかわつてこ^こなかつた家^か事^じの大^{たい}変^{へん}さ、妻^{つま}の苦^く労^{らう}がよ^ようやくは^はつきり^りとわ^わかつた気^きがした。

今^{こん}夜^やは報^{ほう}告^{こく}が^がて^てら、妻^{つま}に礼^{れい}を言^いおう、電^{でん}話^わなら言^いえる。そ^そんなこ^こを思^{おも}いながら、仕^し事^じを終^おえて足^{あし}早^{ばや}に家^{いえ}に向^むかう人^{ひと}々^{びと}の波^{なみ}に混^まじつた。

昼^{ひる}間^まのマサは落^おち着^ついていた。時^{とき}々^{ときどき}「子^こ供^{ども}たちのテ^てス^すトの採^{さい}点^{てん}をす^する」とか「今^{きん}日^{じつ}は居^い残^{のこ}り組^{ぐみ}の大^{だい}介^{すけ}君^{くん}の姿^{すがた}が見^みえな^なくな^なつて近^{きん}所^{じよ}をさ^さがしたの」と独^{ひと}り言^{ごと}のよう^{よう}に言^いう。

横^{よこ}で本^{ほん}を読^よんでいた敏^{とし}男^おが「先^{せん}生^{せい}時^じ代^{だい}のこ^こを思^{おも}い出^だしているの？」と尋^{たず}ねると「今^{いま}も学^{がっ}校^{こう}の先^{せん}生^{せい}だよ」と答^{こた}える。

「明日^{あした}はね、漢^{かん}字^じの書^かき取^とりテ^てス^すトをしようと思^{おも}うの。予^よ告^{こく}のないテ^てス^すトは子^こ供^{ども}たちの実^{じつ}力^{りよく}がわかるけど、み^みんな『ええーっ』つて驚^{おど}ろかな」

会^{かい}話^わの内容^{ない}はま^まともだ。教^{きょう}師^し時^じ代^{だい}に経^{けい}験^{けん}したこ^ことだ^だらう。が、マサは今^{いま}の状^{じよう}況^{きやう}をわ^わか^かつていない。教^{きょう}職^{しょく}を離^{はな}れても^もう^うずい^{ずい}ぶ^ぶん^ん経^たつて^てい^いるの^のに今^{いま}も先^{せん}生^{せい}のつ^つも^もり^りな^なのだ。

「でも、子^こ供^{ども}たちのため^{ため}なら抜^ぬき打^{うち}チ^ちテ^てス^すトも^もたま^{たま}には^はいいと思^{おも}うよ」
敏^{とし}男^おは笑^{わら}いながらマサの言^{こと}葉^はにう^うま^まく合^あ合^あせる。マサは満^{まん}足^{ぞく}そう^{そう}にテ^てス^すトの原^{げん}稿^{こう}を作^{つく}ると言^いつて

腰^{こし}を^あげ^あげた。机^{つくえ}の引^ひき出^だしを^ごそ^ごそ^そや^やつ^つて^ていた^が、や^やが^がて何^{なに}も持^もた^たず^ずに元^{もと}の位^{いち}置^ちに座^{すわ}つた。
「何^{なに}かしようと思^{おも}つたの^のに忘^{わす}れ^れち^ちや^やつ^つた」

無^む邪^{じゃ}気^きな三^{さん}歳^{さい}児^じの笑^{えが}顔^{がお}がマサの表^{ひよう}情^{じよう}にあ^あつた。
「またそのうち^{うち}に思^{おも}い出^だすよ」

認^{にん}知^ち症^{しょう}の介^{かい}護^ごには、忍^{にん}耐^{たい}と寛^{かん}容^{よう}と体^{たい}力^{りよく}と諦^{あきら}めが^がい^いる。身^み内^{うち}だ^だから仕^{しか}方^たが^がない^いと、自^じ分^{ぶん}を慰^{なぐ}めながら諦^{あきら}め^めながら^らで^でき^きるこ^ことも、他^た人^{にん}には^はどう^うて^てい^いで^でき^きない世^せ話^わだ^だと日^ひに日^ひに実^{じつ}感^{かん}する。

マサの場合^{ばあい}まだ^{まだ}よ^よか^かつ^つた^たのは^は徘^{はい}徊^{かい}の^{ない}こ^こと、身^{からだ}体^{たい}が^が不^ふ自^じ由^{ゆう}で^でない^いこ^こと、そ^そして従^{じゆう}順^{じゆん}な^なこ^こも助^{たす}か^かつ^つた。

風^{ふう}呂^ろも嫌^{いや}が^がら^らない、食^たべ^べる^るものも好^すき嫌^{きら}い^{なく}、無^む理^りを言^いうこ^ことは^はな^なか^かつ^つた。

暮らしが落ち着くと敏男は役所へ出向いて介護の認定を申請した。間もなくデイサービスやショートステイの支援が受けられるようになり、週のうちの何日か、少しの自由な時間が持てるようになった。

ありがたかった。いくら自身の母とはいえ、とんちんかんな受け答えや同じことを何度も聞かされることに正直、辟易することもあった。辛抱、辛抱と自分に言い聞かせての生活には何らかの息抜きが必要だった。が、さて何をすれば息抜きになるのか、何をすることが好きなのか考えてみたが、何も思いつかなかった。

在職中は仕事のことばかりを考え、仕事以外に興味を示さなかった自分を思つて苦笑した。狭いけれど庭の隅に食べられる野菜でも植えてみようか。本を読むのは昔から好きだったから、積んだままでまだ読んでいない本を妻に送ってもらおうか。いや、身体を動かすのもいいかもしれない。そう思つて買い物物の途中で町のあちこちに目を向けるとゴルフの打ちっぱなし場があることに気づいた。

会社内外での付き合いで何度かゴルフコースを回ったことはあるが、遠くのコースへ行くのは時間的に難しいことだ。打ちっぱなし場なら自分で時間を決めることができるし運動にもなる。

錆びついているかもしれないゴルフクラブを送ってもらおう。打球場の看板を見上げてみると、いつだったか、同僚や取引先の人と目にもまぶしい緑の芝生の上を談笑しながら歩いたことを思い出した。

スコアーはよくなかったけれどかえつてそれが楽しかった。広いコースを右に左にボールを追いかけて歩き、長いパターがまぐれでカップに入った快感は今でも忘れられない。

敏男は自分が楽しむことで母に優しくできるかもしれないという思いが、先の見えない介護の日々にかすかな光を見たような気がした。

人間の心というものは不思議なもので自分に余裕ができると、今まで気がつかなかったさまざまなものが目に入ってきた。

儲かっているのかなと思える小さな書店、昔懐かしい金物屋、店先に子供が集まっている駄菓子屋、夕方になると急に活気が出てくる惣菜屋。あそこのコロッケはおいしかったなあと思ふと口の中にじやがいもの味がよみがえってきた。

母もコロッケは大好きだ。コロッケを食べる時の母の口癖も可笑しかった。

「コロッケは大好き。骨がないからね」

今夜のおかずはコロッケにしよう。幼い頃見た店主とよく似た跡継ぎ息子らしい人が「揚げたてですから袋の上を開けておきます」と気配りも忘れない。

手に下げた袋から揚げたばかりの芳ばしい香りが懐かしさと一緒に広がる。コロッケの付け

あわ 合せを考えながら歩いてみると、歩道を走る自転車じてんしゃの男性だんせいとすれ違ちがった。

「あつ、篠田しのだじゃないのか？」

片足かたあしを地面じめんに着ついて振り返かえった男おとこの顔かおに懐なつかしさを感じかんじた。

「ええつと、確かたし、中学ちゅうがくの同級生どうきゅうせいの、さ、佐竹誠さたけまことだよな」

「そうオレ。出席番号しゅつせきばんごう、おまえの前の」

「よくわかったなあ」

「おまえ、ちつとも変かわってないもの」

「それはないだろうけど」

佐竹誠さたけまことに声こゑをかけられて、この町まちに戻もどって来てはじめて昔むかしの知り合あいに会あえたことに気きづいた。

「おまえ帰かえって来きているのか。まだ定年ていねんじゃあないだろう」

母ははの介護かいごのために実家じっかに戻もどっていることを言うべきかどうか迷まよった。

「ちよつと事情じじょうがあつてなあ」

佐竹さたけは敏男としおが即答そくとうしなかった少しの間すこで何かを感じかんじたのか、それ以上いじょうは聞きかなかった。

「困こまったことがあつたらいつでも相談そうだんに乗のるよ」

お互たがいに「またな」と言いって手てを振ふった。

出席番号しゅつせきばんごう、おまえの前の……と言いった言葉を思おもい出だした。

中学ちゅうがくの物理ぶつりの先生せんせいは質問しつもんの答えこたえを名指なざすのに「出席番号しゅつせきばんごう、十番じゅうばん、答えこたえを言いってみろ」と十番じゅうばん

単位たんいで当あてていくのが常つねだった。十番じゅうばんの生徒せいとが答こたえられないと「次つぎ、十一番じゅういちばん、わかるか？」

という具合ぐあいだった。

佐竹誠さたけまことは二十番にじゅうばんで篠田敏男しのだとしおは二十一番にじゅういちばん。先さきに佐竹さたけが当あてられて答こたえられないと敏男としおに回まわって

くる。その印象いんしょうがよほど強つよかったのか、今いまでも出席番号しゅつせきばんごうの順じゆんを覚おぼえていたのだ。

四十年よんじゅうねんも前の中学時代ちゅうがくじだいのことを忘れわすれず、顔かおを見みた途端とたんに「出席番号しゅつせきばんごう、おまえの前の」と言いつ

たことが可笑おかしかった。

同い年おなとしで白髪しらがまじりの佐竹さたけの顔かおと、丸坊主まるぼうずでどこか頼たよりなげだった幼い顔かおがダブみって見みえた。

二日後ふつかご、佐竹さたけから電話でんわがかかってきた。「一杯いっぱい、飲のまないか？」という誘さそいだった。

マサの状態じょうたいは悪わるくない。何なによりいいのは夜早よるはやく寝ねてくれることだった。

夕食ゆうしょくをすませると「もう、寝ねる」と言いう。あまり早い時間じかんから床とこにつくと朝早あさはやくに起おきるの、

一時間いちじかんほどテレビを見みせて風呂ふろに入れる。マサがテレビを見みている間に、台所だいどころの片づけや洗あらい物もの

をすませて風呂ふろの準備じゆんびをする。

夜中よなかに一度いちどトイレに起おこせば、後あとはぐっすり寝ねる。

マサは敏男としおを息子むすこと認識にんしきしていないので無理むりを言いうことはなく、たいていは素直すなおに聞きき入いれた。

夜マサを一人にすることに少しの不安があったが、普段のようすがわかっているので佐竹の誘いに応じた。

「コロッケ屋の裏にある『和みや』にいるよ」

家から近いことも安心した。

通りの一筋裏に「和みや」と書いた看板を見つけた。

何日か前にこの通りを歩いた時「地元の野菜を使ったごはん屋さん」と店名の上に書いてあった文句を思い出した。野菜中心の店なら一度母を連れて食事に行ってもいいな、と思い覚えていた。

鈴がついたドアを開けると、カウンターに腰かけていた佐竹が「よう」と手を上げた。

ざっと見渡しても二十席もない、こぎれいな和風の店だった。

平日のせいかテーブル席に三人、カウンターに二人いるだけで後は佐竹と敏男だけだった。

服装も髪も化粧も、いかにも水商売らしくない五十歳前後のママさんと、三十歳前後の女性が

がカウンター内で料理を作ったり客の相手をしている。

ママにおしぼりを渡されビールを注文した。

「オレの同級生の篠田敏男。この町出身。おとといこの通りでばったり会って誘ったわけです」

と佐竹はママともう一人の女性に敏男を紹介した。

敏男は「よろしく」と挨拶をした。

「このママの料理がうまくてなあ。オレ、三年前にヨメさんをがんで亡くしてから、週に三回か四回はここで夕食の世話になつていゝんだ。なあ、ママ」

「料理、ほめていただいて嬉しいです」

佐竹は、さやいんげん豆の胡麻和えとナスの煮びたしをあてにビールを飲んでいた。

ママはほかの客にも目を配りながら、奥にある厨房を行ったり来たりしながら接客をして

いた。

佐竹は酔って饒舌になつても、敏男がなぜ実家に戻っているのかを深く聞かなかつた。中学

時代の面白かつたことや先生に怒られたことを、身振り手振りで話してみんなを笑わせた。

昔から朗らかな男だった。

ヨメさんが死んでしばらくは落ち込んでいたと言う。世界中の不幸が全部オレの所にきたと思

うぐらい辛かつた、とも言つた。

『時は良薬』って言うが本当だよ。一年ぐらい経つた時、オレは生きていゝんだ、このままじゃ

両手を上げておどけて笑つた佐竹に、ほかの客が振り返つて笑つた。

「オレ、心まで死んじゃあいけないと思ふんだよね」

敏男は佐竹の意外な言葉にどきりとした。酔ってはいいたが佐竹の本音が胸に響いた。おどけていても笑っていても心の奥にはみんな何がしかの辛さを抱えている。

「身体や顔にできるシミって、悲しみや苦しみの『しみ』からきているのかなあ」
長い年月の間にできたシミを、濃くしたり薄くしたりして生きているのだと佐竹は言う。
うまいおかずをあてにビールを飲み、久しぶりに笑った気がした。

「また、あの店で会おうな」と言っただけで別れた。

「今後とも、ごひいきに」とママが笑顔で送ってくれた。

一人でマサを介護しようとした時、男の敏男には何もかもが不安だった。妻にまかせつきりでしたことがない家事、認知が進むマサを相手にした時に、自分の邪悪な心が何かをきっかけに現れはしないか、実の母だという理由で、どんなことにも寛大に対処することができるのか、そんな不安が常に付きまとっていた。

「高齢の母の介護に疲れ、息子の男性が母を絞殺」「無理心中をはかる」などの新聞記事やテレビのニュースが報道されるたびに、自分は大丈夫と言い切れるだろうか、安心して眠るマサの細い首に手をかけたりはしないだろうか、そんな思いが頭をかすめることがある。

勉強があまり得意でなかった佐竹が「オレが答えられなかったから出席番号次の、おまえに迷惑をかけたなあ」と詫言「心まで死ねない」と言った言葉が、今はかすかな励みになっていることを感じていた。

例年より早くから暑くなった夏を、マサも敏男も何とか乗り切った。そのせいか、九月に入るとめっきり涼しくなった。

季節が緩やかに変わっていく。薄い服の上で羽織るものがないと朝晩は寒い。

週に二度のデイサービスの日、迎えの職員に「篠田マサさん、寒くはないですか？」とマサにかけた言葉には「つ、とした」。

男で、まだ若い敏男にはさほど感じない寒さを年老いた者は敏感に感じる。日々、年配者の世話をしているとはいえず、若い者が気づいて肉親の自分に気づかなかったことが情けなかった。

マサを送り出して急いで秋ものの洋服を探した。何枚かのブラウスやカーディガン、ズボンを出して太陽の陽に当てた。

夏の日差しとは違って、光も風も空気もずいぶん柔らかくなってきた。

積乱雲がうろこ雲にかわり、蟬の声が秋虫の鳴き声に変わっていることに気づいた。

マサと同居し始めてから今日まで、ビデオの早送りのように過ぎた。日々を早く感じるのはマサとの生活が充実しているからなのか、わからないことに戸惑うばかりで必死だったからなのかわからない。

やることに追われ、マサの思いもつかない行動や言動に振り回され、それを哀れに感じたり苦笑いをしているうちに季節が変わっていく。何度季節が変わればこの状態から抜け出せるのか、愛おしい母の世話が嫌だからではない。会社や家族を犠牲にしてまで一人の老人にかかわる価値が果たしてあるのか、そんな思いがふとよぎることがある。

自分を産んでくれた恩、育ててくれた恩、それを今返しているのだと思わなければいけないのだ、それは十分わかっていた。

ゆつくりと流れて行くうろこ雲をぼんやりと見ながら、時にマサを疎ましく思う自分の気持ち消してしまおうと、空を見上げた。うろこ雲は形を崩して西の空へ消えていった。

夕方五時過ぎにマサは帰って来た。朝迎えに来た若い男の職員がマサの傍らで身体を支え、いつも何かしら声をかけている。

「お年寄りには会話が必要なのです。特に認知の方には。これ以上症状が進まないように、何でもいいですから話しかけてください」

医者にかかった時にそう言われていたことを忘れていた。マサに良い、と言われていたのに自分本位でしか行動していなかったことにも反省した。

「着きましたよ。段差に気をつけて」
マサはゆつくりと上り框に腰かけた。

「ただいま」と言うのかと思ったが「はい、こんにちは」と言う。
「篠田マサさん、ここはあなたのおうちですから『ただいま』ですね」

名前はフルネームを繰り返すことでも自分がだれかを認識させ、会話のちぐはぐさを正しい方へと導かせているようだ。

心得たものだと敏男は感心した。
「かあさん、おかえり」

職員に礼を言つてマサの世話のバトンタッチをする。次の利用日の確認をして、職員は帰って行った。

マサは立ち上がり居間へ入ろうとすると「いつもお世話をありがとうございます」と言う。
敏男を息子とわかっていないので家でもていねいな敬語で話す。

施設で風呂に入れてもらえるのでシャンプーと石鹸の香りが、マサが動くたびに広がる。
週に二日のデイサービスでも敏男の負担は軽くなる。食事の準備だけでなく何よりも心が安

らいだ。この香りが鼻をくすぐるたびにほっとする。
(ありがたい)

「お茶、温かい方がいいよね」
敏男が台所へ立とうとした時、マサに呼び止められた。

「息子に内緒の話なんだけど、聞いてくれますか？」

ボクはあなたの息子ですよ、と言おうとしたがマサの真剣な顔つきを見ると言えなかった。手早くお茶を入れてマサと自分の前に置いた。マサはお茶を一口飲むと、ぼそぼそ話し始めた。

「お父さんにね、死んでも敏男に言っただけね、はいけないと言われているんですけどね」

(何？ いきなり、何の話？)

敏男も一口お茶を喉に流し込んだ。喉の奥でぐくりと音がしたようだった。

マサはテーブルに目を落としたまま話し出した。

「お父さんはね、実は、殺されたんですよ」

敏男は持っていた湯飲み茶碗を取り落としそうになった。いくら認知症が進んできくとはいえ、殺された、とは何ということと言いつつ出さぬだろう。思わず「どういふことなの？」と大声を出すところだった。

ここで大声を出してマサを委縮させては肝心なことを聞き出せない。今のマサにとって自分はそのお世話の人で息子ではないのだ。他人のふりをして話の続きを聞かないことには何のこともだかさっぱりわからない。そう判断した敏男は冷静になろうと努めた。

「ご主人の身に何かあったのですか？」

マサは遠くの過去を見つめるような目をして言った。

「あれは息子の敏男が三歳の夏でした。やんちゃ盛りでとても可愛かったです。トンボの柄の甚平を着てね。お父さんも可愛くてしかたがないようですね。私も若かったです。学校勤めと家のことは忙しかったですが、お父さんも学校の先生でしたから」

核心から離れた方向に話が進んでいる。何を話そうとしていたのかわからなくなっているようだ。

「ご主人は病気がやあなかったんですか？」

「ああ、その話ですか。病気といえは病気でしたかねえ」

いきなり殺されたと言つて驚かせ、問いただすと病気だと言う。マサの脳内はどうなっているのだろうかと思うと、イライラと腹立たしさがこみ上げてきた。

「殺されたと言つのは嘘ですか？」

「いやいや本当ですよ。嘘じゃありません」

いつものマサらしくない声で、小学生の子供を叱る口調になった。

「息子には絶対に言わないで下さい」

それはわかったから話を進めて、と敏男は焦り始めていた。

「あれは敏男が三歳の夏の夜でした」

また初めから、同じことを言い始めた。

「それで、その先は」

「お父さんは寝転がって野球中継を見ていましたかね。大の巨人ファンでしたから夢中で見ていました。私も若かったです」

話がそれる前に軌道修正の声をかける。

「野球中継を見ていたんだね」

「そう、大の巨人ファンでね。私は台所で洗い物をしていたかしら。お父さんに背を向けていましたのでようすがわからなかったですが、お父さんの『うぐつ』と言う声とも悲鳴ともつかない声に驚いて振り返ったら、敏男がお父さんの横で泣いていたんですよ。何があったのかわかりませんでした。お父さんは身体をエビのように丸めてお腹を抱え、声が出ないような、唸っているような、そんな感じでした。私はあわてて敏男を抱きかかえ、救急車を呼びました。救急車が来るまで何をどうしたらいいのかわらなええました。私が作った夕食の何かで食あたりをしたのかと、そればかり心配していました」

「そこにはだれかほかの人はいたの？」

「だれもいません。お父さんと敏男と私だけ」

「お父さんは殺されたって言ったじゃない。三人しかいないのに一体だれに殺されたと思ってるの」

敏男は、マサが認知症であることを忘れて詰め寄った。マサは長年の間で、夫が死んだことを殺されたと妄想しているのだろうか。それとも被害妄想なのか。認知症のマサの言葉をそのまま真実として受け入れていいのだろうか。

病気のマサに正気の自分が振り回されている、敏男の頭の中で幾通りもの思いが渦に混ざり攪拌されているようだった。

「すぐに病院へ行っただろう」

「はい、夜だったから何軒かの病院に断わられたけどね」

「たらい回しにされたことで殺されたと思っっているの？」

「いいや。幸いすぐ医者にも診てもらえたし応急処置もしてくれました。食あたりでなかったこともわかって、私は少し安心しました」

「原因は何だったの？」

「三、四日で回復に向かっていたんです。食事もお粥ですけど食べられるようになりました。一週間もすれば退院できると喜んでいたので」

「死因はわかったの？」

「明日は退院できますよ、と先生に言われていた前の晩に、大量の吐血をして意識がなくなっ

たのです。その状態のまま三日後に息を引き取りました」

「何だったの、病気は」

「お葬式とその前後のことはあまり覚えていません。その時は何か悪い夢をみているような気がして、早くこの夢から覚めると、祈っていただけのよう気がします。何日かたつて夢から覚めましたけど、そこにはお父さんがいませんでした。仏壇の前で、笑っている写真に何度も声をかけましたが笑っているだけででした。どうしたらいいのか、お父さんに聞きたかったのですがね」

「よくなりかけていたのに何で急に吐血したのか医者は説明をしてくれたの。手遅れだったの。医者が何か重要なことを見逃していたんじゃないの。だから殺されたと思っっているんだね」

敏男の質問にマサの答えはちぐはぐで、マサは自分の言いたいことだけを話し続けた。同じことを繰り返しながら少しもかみ合っていないかった。

「お父さんと約束したんだよ。敏男には絶対に言わないでおこうと」

「何を隠しているの。ボクに言えないことって何なの」

敏男は冷静さを欠いていた。他人のふりをして聞き出すつもりが、つい息子本人としての質問になつていった。

「あなた、息子に言わないと約束できますか？」

「します、しますから話して」

「絶対ですよ」

少し心が痛んだ。他人になりすまして真相を聞き出そうとしている自分が何か大きな罪を犯しているような気がした。

座っていたマサがいきなりにじり寄って来て敏男の耳元でささやくように言った。

「お父さんの腹部には、小さなふたつの足跡がくつきりと残っていたんですよ。お父さんが寝転がっていた横のちゃぶ台の上から敏男がお父さんのお腹を目がけて飛び降りましたでしょう、と医者は言いました。その時の衝撃で内臓を損傷したのでしょうか。だれが悪いのではないのです。先生にそう言われた時にお父さんと私は硬く約束しました。このことは死んでも敏男に明かさないと。でもあなたは他人ですから。私がいなくなる前にだれかに打ち明けておきたかったです」

敏男のそばをゆっくりと離れるといかにもせいせいとした顔で、うっすらと笑みまで浮かべて茶を飲んだ。

敏男は全身の力が一気に抜けた。

何を考えどうしているのかわからなかった。自分の気持ちとどう向き合いなだめたらいいのか、混乱していた。

マサから真実を聞き出そうと、入っていた肩の力が音を立てて崩れるようだった。全身に

虚脱感を感じた。

横でにこやかに空（くう）を見つめるマサを見た。見てはいたが何も考えられなかった。何てことを聞いてしまったのだろう。知ってはいけないことをなぜ聞き出してしまったのだろう。父の死の直接の原因が自分にあつたとは何と残酷な事実だろうか。マサの長年の苦勞も悩みも、そして自分が片親であるという負い目も、全ての原因はこの自分にあつたのだ。若くして亡くなった父を時には恨んだこともあつた。母のどこか八つ当たりに向けられた怒りも、亡くなった父親のせいではないのかと、唇を噛んだこともあつた。長年の間違つた思いはどうすれば薄くなるのか、消えることはあるのか。一生大きな岩の塊となつて溶けるはずのない事実を、どう受けとめて処理すればいいのか、答えはすぐには見つからなかつた。

「大丈夫ですか？」

黙つて俯いている敏男にマサが声をかけた。

「すいませんが、私、お父さんのお墓参りに行きたいのですが、連れて行ってもらえませんか？」

だれにも打ち明けられなかつた夫の死のことを口にしたこと、脳のどこかが繋がつて思い出したのか、墓参りに行くと言う。

敏男を我に返らせた言葉だつた。

瞬時に老いた母と息子に戻つた。

「かあさん、今日はもう遅いから今度にしよう。仏花や線香も買わないといけないし、全部そろえて行くうね」

「そうですね。そうしましょう。今日は疲れたから寝るとしますか」

マサは憑き物が落ちたように穏やかな顔で床につき、すぐに寝息をたてた。

マサも悩んでいたのかもしれない。真実を言わないまま死んでいくことは嘘をついたままこの世から消えてしまうことになる。正気だった頃は「嘘も方便」と自分に言い聞かせて黙つたまま通そうとした。息子が傷つくことを恐れて口をつぐんできた。

認知症を患つて息子と他人との区別がつかなくなつてもまだ、息子には知られないようにという気持ちだけはかたくなに脳に沁みついたままだつた。

意地らしかった。幼児が一心に秘密を守ることに似ていて切なかつた。

脳の委縮による認知はどこか三つ子に還ることに似ていた。が、魂だけは忘れることなく一途に守つていたのだ。

「息子には絶対に言わないで下さい」

何度も繰り返すマサの言葉を思い出しながら、敏男はマサの身体にかけた肌ぶとんに顔を埋め

た。

「かあさん、ごめん」

嗚咽がマサに気づかれ起こしてしまわないかと気にかけながら、こみ上げてくる苦しみと切なさ涙になつて止まらなかつた。

庭に面した網戸の外からかすかに音がした。

いつの間にか雨が降っていた。芝生の上にさわさわと優しい雨音をたてて秋の気配が入り込んできた。

マサの寝息と雨音が、しん、と敏男の胸の中に忍び込んできた。

マサの話の話を聞いてから敏男の心が晴れることはなかつた。何をしていてもその瞬間を想像して目の裏に映し出されるのは決まって父の腹に残る小さな足跡だつた。

起きている時は仕方がないと自分に言い聞かせ否定できるのだが、厄介なのは夢に現れることだつた。

大人の自分がちやぶ台の上から父の腹に向つて飛び降りる。父の悶絶した顔がテレビで見るとンビの形相で「ぐえつ」と奇妙なうめき声を発する。両手を高く上げて空（くう）を掴もうとする父の口からは鮮血が吹き出し黒い瞳が真っ白い空洞と化する。

夢はいつも同じだ。同じ夢を見るたびに全身は恐ろしいほどの汗をかき、跳ね起きる。

三歳の自分が想像できないのか、得意そうに台の上で跳ねているのは大人の自分だ。

隣で寝るマサを起こさないうようにふとんを抜け出し、シャワーを浴びる。冷たい水を頭からかけると恐ろしい夢が冷水の飛沫とともに排水溝に吸い込まれていく。そんな気がしていつまでも浴び続けた。

浴室の壁に手をつき、二度とそんな夢を見ないようにと祈る。だが祈りは叶わず、全身にかいた汗を流すだけだつた。

敏男が常に何かを考え心が乱れていても、マサとの生活はいつもと変わりなかつた。

二人分の食事を作り洗濯をして掃除機をかけ、たまつたゴミを出し、家の周りを掃除する。週に二度のデイサービスも敏男を他人と思つているマサのようすも変わっていない。自分一人の昼食に何を食べようかと迷つた時は和みやへ行つた。

一時を過ぎているがまだやっているといるだろうか。店の前で二人のサラリーマン風の男性とすれ違つた。一人は楊枝を口にくわえもう一人は腹をさすつている。満足そうだ。

敏男は会社勤めをしていた頃の自分を見たような気がして懐かしかつた。あの頃は忙しかつたけれど毎日が充実していたと思ひながら、敏男の横を通り過ぎて行く男たちを横目で追つた。会社員だつた時に今の自分を想像することができただろうか。通りのガラスに写つた姿が、

どこか遠くの国から来た老人のように見えた。

食欲はあまりなかったが、今自分が体調を崩してはマサの面倒を見るものがいなくなる。何のために会社を辞め家族と離れて暮らしているのか、全てを水の泡にしてしまうわけにはいかなかった。

「こんにちは」

敏男はゆつくりと店のドアを押した。

「あらっ、いらつしやい」

佐竹に誘われて以来、夜は何度も来ることがあった。昼に来たのは久しぶりだった。

「お昼、まだ大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫ですよ。どうぞおかけになって下さい。お好きな席へ」

他のテーブルには食事をすませたのか、コーヒーを飲んでいる女性がふたりいるだけだった。

ママがおしぼりと水を運んで来た。

「しばらくお顔が見えないので、お母様の具合でも悪いのかと心配していましたのよ」

「年寄りを抱えていると、なかなか出られなくて」

これまでこの店に何度か訪れていた時に、母の介護のために会社を辞めて実家に帰ってきていること、マサの認知のことも佐竹とママには話していた。

「大変ですね。男の方なのに、よく見てあげて」

社交辞令とわかっていても、励ましや同情の言葉はいくらかの支えになった。だれにでも話せない愚痴を聞いてもらえるだけでも、敏男の気持ちはなごんだ。

遅く来たことを詫言びて、定食を頼んだ。

「母の具合は相変わらずです」

おしぼりを使いながらママの方を見た。

ママは厨房に入りかけて「篠田さんの体調は？」と聞いた。

敏男はママの質問の意味がわからず、改めてママの顔を見た。

「何でもなかったらいいんですけど。少しお疲れのようだから」

客ひとりひとりの顔色を見て応対するのが商売とはいえ、ひとこと言葉を交わすだけで人を見極める目は、鋭くときざまさされているのかもしれない。

正直、自分でも気落ちしていることはわかっていた。マサの告白を胸の奥に閉じ込めておくにはあまりにも衝撃的だった。心が揺れ、不眠や悪夢に悩まされ、表情がすぐれなかったのをママは見逃さなかったのだろうか。

敏男は（何でもないです。し慣れないことばかりで、疲れが出たのでしよう）と言おうとしたが、まっすぐなママの視線に当たり障りのない返事で流してしまうことができなかった。

「いろいろありまして」

そう返した敏男は、もう少し気持ちが悪く落ち着いてほかのことも考えられるようになったら、佐竹とママに聞いてもらおうと心のどこかで決めていた。

どこまで本当のことを、どこまで冷静に話せばいいのか今は考えがまとまっていない。だれかに話すことで心に生じた重りが軽くなり、一歩前へ踏み出せるかもしれないというかすかな望みがあるような気がしていた。

「お金の相談以外なら」

昼定食を敏男の前に置きながら、ママの冗談とも思える言葉と笑顔につられて笑った。

昼食の野菜三種類の盛り合わせはおいしかった。野菜本来の味やうまみを生かした品のよい味付けに、ママの細かい心遣いを感じた。

「お酒のあてより薄味にさせてもらっています」

ママの夕食のおかずは二、三品ほど持ち帰れるかどうかを尋ねた。ポリ容器に入れて渡してくれた時「よかったら、お母様も一緒にどうぞ」と言ってくれた。

佐竹が何度もこの店に通う訳がわかった。味はもちろん、ママの笑顔、無償の愛情を注ぐ母のような包容力と細かな気遣いにひかれて来る客の気持ちがわかる気がした。

ママの介護を決意して家に戻った時、男の自分が老いた母の生活全部の面倒を見ることに、戸惑いと不安と、そしていけないことだとは思いつつ、どこかに不満があった。

ママの年金で入所できる施設はあった。が、そうすることは、ただ一人の息子にも見捨てられたいというママの思いと、敏男自身の負い目となって、この先一生、死ぬまで後悔するのではないかと思いつめたことだった。

大きな変化のない毎日が何と幸せなことか。会社や家族に対してのこれまでのほんの些細な不満がわがままだったと今は思える。

ママの下着を洗うことにも慣れた。ママの突拍子のない会話の相手にも抵抗なく合わせることもできるようになった。わずかな時間を自分のために使い、和みやで佐竹やママと笑うこともできるようになった。

だが、ママの告白によりできた心の闇は、四方八方に鋭い棘を出すウニのように、あらゆる敏男の内部をうごめき刺し続けた。

ママとの同居を望まなかったら、知ることにはなかった事実。知ってしまったことが良かったのか、悪かったのかわからず、自分を慰める言い訳さえ見つけられずにいた。

しばらくぶりに佐竹から電話があった。和みやで、約束なく行き合わせることはあったが、連絡をして会うのは久しぶりだった。

敏男が入って行くと、佐竹はカウンター席で相変わらずママを相手にビールを飲んでた。敏男

の顔（かお）を見るといつもどおり「よおつ」と手（て）を上げ（あ）げた。

「ママさんがなあ、篠田（しのだ）が元氣（げんき）なさそうだって言う（い）もんで、心配（しんぱい）してな」

「余計（よけい）なおせっかいですよねえ」

ママがカウンター越し（ごし）にビールジョッキを差（さ）し出（だ）した。

「篠田（しのだ）は昔（むかし）からそういうところあんまり表（おもて）には出（だ）さないからわからないんだけど、さすがはママ、隠（かく）し事は（ごと）できないよ」

「そんな、ねえ」

「でも、氣（き）にしてくれるのはありがたいね」

ママは、他（ほか）の客（きゃく）の注文（ちゅうもん）に応（こた）えながらも、小鉢（こぼち）に今夜（こんや）のおすすめの料理（りょうり）を取り分（わ）けて敏男（としお）の前に置（お）いた。

久しぶりに飲（の）むビールはおいしかった。

肴（さかな）のあては季節（きせつ）の野菜（やさい）を使い、初物（はつもの）の秋刀魚（さんま）の横（よこ）には緑色（みどりいろ）が濃（こ）いスタヂが添（そ）えられてあつた。目（め）からも食欲（しょくよく）がわく。

「何か悩（なや）みがあるのなら言（い）えよ。『物言（ものい）わずば、腹（はら）ふくれる』だったかな、昔（むかし）の人はうまいこと言（い）うよ。まあ、オレなんかに話（はな）してもいいアドバイスは期（き）待（たい）できないけどな」

佐竹（さたけ）は、ビールを飲（の）んだ。

敏男（としお）はあまり飲（の）める方（ほう）ではなかったが、今夜（こんや）のビールは苦（にが）く感（かん）じなかった。むしろ乾（かわ）いた喉（のど）に流（なが）れ込む細（こま）かい泡（あわ）が、食（しょく）道（どう）の壁（かべ）を適（てき）度（ど）に刺（し）激（げき）して、うまいと感（かん）じた。

話（はな）し出（だ）そうと勢（いきお）いをつけたわけではない。でも話（はな）すのは今（いま）かもしれないという氣（き）がした。

幸（さい）い店内（てんない）はすいていて、カウンター席（せき）は佐竹（さたけ）と敏男（としお）だけだった。

敏男（としお）は、マサの認（にん）知（ち）症（しょう）の症（じょう）状（じょう）が徐（じょ）々（じょ）に進（しん）んできていることや自分（じぶん）を息子（むすこ）だとわからないこと、突然（とつぜん）墓（はかま）参（ま）りに行（い）くと言（い）ったり、実家（じっか）へ帰（かえ）ると言（い）って、荷物（にもつ）をまとめ出（だ）したりすることなどを話（はな）した。

そして息子（むすこ）には内緒（ないしょ）だと言（い）って父（ちち）の死（し）の原因（げんいん）を打（う）ち明（あ）けたこと、夫（おつと）とマサとで一（いっ）生（しょう）息子（むすこ）には秘密（ひみつ）にしようと言（い）ったことなどを、ゆっくり詳（くわ）しく話（はな）した。

佐竹（さたけ）とママは途（とち）中（ちゅう）でいっさい口（くち）をはさまなかった。言葉（ことば）を選（えら）びながら、とつとつと話（はな）す敏男（としお）を氣（き）にしているのか、二人（ふたり）が目（め）を合（あ）わすこともしなかった。

ひとしきり話（はな）した後（あと）、敏男（としお）は息子（むすこ）としてどうマサに向（む）き合（あ）っていけばいいのか、このまま他人（たにん）のふりをして世話（せわ）を続（つづ）けていけばいいのか、そして何（なに）よりマサがこれまで敏男（としお）を恨（うら）んで生（い）きてきたのではないかという懸念（けねん）が心（こころ）の闇（やみ）とな（な）っていること。どうしようもなく辛（つら）くて落（お）ち込（こ）んでいく自分の氣持（きもち）をどう処（し）理（り）すればいいのか。このままではいけないことは十分（じゅうぶん）わかっているけど、マサの顔（かお）を見（み）れば申（もう）し訳（わけ）ない氣持（きもち）がわいてくる。

その一方で事実を隠していた母を恨み、介護者としてまともな世話ができていくかどうかも見極められない不安が湧き上がっている。

「迷路に迷い込んだようで、出口が見えないんだ」

敏男が話し終えても、だれも何も言わなかった。

ほかの客が頼んだのか厨房から、卵焼きの匂いがしてきた。もう一人の若い方の女性が鼻歌を歌いながら焼いているようだ。

しばらくして「ママ、ごちそうさま」と言ってる酔い加減の客が出て行く。

いつの間にか佐竹の飲み物がビールから焼酎に変わっていた。大ぶりのコップをゆつくりと回しながら、佐竹が口を開いた。

「それでもみんな、生きているんだよなあ」

ぼそりと言って、佐竹は焼酎を飲んだ。

答えはだれにも見つからなかった。安っぽい言葉で慰めることはできたかもしれない。が、佐竹もママも何も言わなかった。

「せっかく誘ってくれたのにボクの愚痴になってしまった。ごめん」

敏男が詫びた。

ママが首を横に振りながら、薄い笑顔をつくった。

「おむすびでも作りましょうか？」

カウンターの奥にママの姿が消えると佐竹と敏男の二人だけになった。

「また、飲もう」

男同士の会話は、素気なくぶつきらぼうだった。言葉はなくてもそれでいいのかもしれない。

佐竹も妻を亡くしどん底まで落ち込んだに違いない。いろんなことを思い後悔もしただろう。妻の後を追うことも考えたと言った男が口にした言葉の奥には、深く重いものが含まれていると感じた。

秋が深まり「寒くなりましたね」という挨拶が日常になると、身も心も落ち着いた気分がする。寒さで身体が縮まり行動が制限されるからかもしれない。

それは草木にも当てはまる。狭い庭の木も雑草も成長がとまり、冬に向っての支度なのか、赤色や黄色に変色し、紅葉の後は葉を落とす。

人間も心に溜まった澱や身についた汚れを季節とともに全て落とし切れることができればどんなにすっきりすることか。暖かい春になれば、何の汚れもしみもない新芽となって太陽の日差しを浴びることができたら、生まれたての赤子のように無垢の心になれるのに。

そんな取り留めもないことを考えながら、草紅葉に色づいた庭を眺めていた。

マサは朝からデイサービスに行った。見た目は以前と変わらなかったが、食事の量が減ったように思えて気になっていた。

デイサービスのない日の昼食に、時々和みやへ行くことがある。料理のレパートリーが少なくてつい店屋物が多くなることにマサは文句を言わなかった。が、黙って残すようになった。

大好きなコロッケも「食べないの？」と聞くと「夜、胸につかえてね」と半分残す。そういうえば、夕べもコロッケだったことに気づいて敏男は苦笑した。

そんな時に助けられたのは和みやの野菜食だった。

マサはこの店の料理が気に入っていて「昔懐かしい味だね」と食が進むようだった。ママとの会話も楽しそうと一緒に食べる敏男もうれしかった。

優しいママを敏男の妻の浩子と勘違いをしている時もあるれば、孫娘の亜美を相手に話しているふうにも見えた。

正気と認知の世界を行ったり来たりのマサの脳内で起きている幸せの部分は、どれほどの大きさを占めているのだろう。本能のひとつの食欲の味覚だけはまだ残っていて、幸せと感じているのかもしれない。

氣遣ったママが、他の客に出すより小さめにカットしたメロンと桃のシャーベットを、大事な口に運ぶマサの顔には満足そうな笑みがこぼれていた。

一日の時間がゆっくりと流れていく。通りを走りすぎる子供たちの元気な声が今朝も聞こえてくる。ランドセルを揺らしながら走るのか、中身の教科書やノートやペンケースが触れ合う音からも活気が伝わる。

「子供たちは元気がいいね。宿題、忘れずに持って行っているかね」

独り言のようにマサが言う。

熱めのお茶を入れた湯飲みを両手で抱えて通りの方向に目を向ける。

同じテーブルで新聞を広げていた敏男が「大丈夫だよ」と言い、マサを見る。

マサは時々先生に戻る。子供たちを心配して独り言を言う。

時には幼い敏男の母親にもなる。

「こんなに暗くなるのに、敏男がまだ帰ってこないんだよ。近くを見てこようかね」

「いいよ、ボクが探してくるからここにいて下さい」

「すみませんね。お願いします」

それだけの受け答えで安心するのか、表情も態度も落ち着く。

マサが穏やかであれば敏男の気持ちも安らぐ。ここ何日かのふたりの落ち着いた日々は、気候のせいや、介護生活に慣れたせい、マサとの同居に腰をすえ覚悟をしたせい、たくさんの慣れが

あることは確かだった。

その上、だれにも話すことはできない、聞いてもらえる人などいないと思ひ込んでいたマサの告白を、佐竹とママに話せたことが何よりも敏男の心を軽くした。

話してずいぶん時間も経った。明確な答えがあればそれに越したことはないが、たとえ答えがなくてもあの時の切羽詰まった、持つて行きようのない思いを口に出せたと言うことで、闇は少し薄くなった気がした。

話した直後には後悔があった。二人に不快な思いをさせたのではないか、という思いは今でもある。

ありがたいことに二人は以前と変わらない態度で付き合ってくれている。それが何よりうれしかった。

週に一度か二度、昼にマサと二人で和みやへ行くのが習慣になっていた。穏やかにゆったりと流れる時間もまた敏男には心が休まるひとときであったのだ。

マサは食事の前に、コップ一杯のビールが欲しいと言ひ、飲むと脳細胞同士がうまくつながるのか、嘘のように正気に戻る。

若い頃は女手一つで幼な子を育てなければと、日々張りつめた生活を、世間に隙を見せまいとして、欲しくても飲めなかっただろうことを思うと、素直に飲みたいと言うマサの気持ちがいれしかった。

ささやかな楽しみを遅ればせながら感じてもらうと、いつも思う。

「もう一杯飲む？」と尋ねると「この一杯がおいしいのよ」と唇にのびた泡をおしぼりでぬぐう。喉の奥から出そうになるゲップを出すまいと、しわの手で口を押える。

人前でのゲップが恥ずかしいと思うのか、上目づかいににこりと笑う。そんな仕草がかわいらしくてママと敏男は顔を見合せて微笑む。

陽気に笑うマサを母親のように慕うママとのやり取りは、マサの認知を忘れさせる至福の昼下がりがだった。

デイサービスの施設から「インフルエンザが流行っていますから、家庭でもうがい手洗いの励行をお願いします」との通達があつて間もなくマサは体調を崩した。

入院をするほど悪くはなかったし、ただの風邪との診断だったので家で養生することにした。年寄りの風邪は命取りになるといふので入院を望んだが、インフルエンザ患者の出入りが多い病院での感染を恐れて、医者の指示に従った。

熱もさほど高くなくお粥程度の食欲はあつたので、一週間もすれば回復するだろうと敏男は思っていた。

「和みやの葉つ葉の炊いたのが食べたいね」と言うので買いに行き、ママに頼んで白身魚を煮てもらったりした。

マサはその都度おいしそうに食べた。普段の食事より食が進むのか、お代わりをすることもあった。

寝込んで六日目の夜、夕食の後に市販のプリンを食べた。

「昔はこんなにおいしいものはなかったねえ。冷たくて甘くてツルリと口に入っ。幸せの味だよ」

リクライニングベッドの背もたれを起して、皿に移し替えたプリンを口に運ぶ。

「それはよかった」

「はい、あなたもひと口お食べ」

横にいる敏男にすくったプリンを差し出す。敏男が身を乗り出して口に入れてもらおうとマサは笑った。

「まるで子供みたいだね」

（かあさん、ボクはあなたの子供ですよ。少し老けましたけど、あなたの息子ですよ）そう言おうとしたがやめた。

一緒に暮らす敏男をマサは何者だと思っているのだろうか。ただの親切な介護者。風呂に入れてもらう時にさらす裸体も、時にしてもらう下の世話も、女性としての恥ずかしさがなくなってしまふほど脳の委縮が進んでいるのだろうか。

この先もずっと、何年も老女と介護者としての日々が続くことを思うと、やりきれない思いが、水に落とした一滴の墨のように不安となつて四方に広がっていった。

反面、息子としての責任感がそんな思いを打ち消した。そんなことを考えてはいけない。長年苦勞をしてきた母のためにしなくてはいけない当然のことなのだと否定し、自分を責めた。

マサが小皿にスプーンを置く小さな音がした。

「ごちそうさま。ありがとう」

「おいしくてよかったね」

皿を片づけようとする敏男の手をマサが両手で握った。そしてもう一度「ありがとう」と言った。

「どういたしまして……」

今、瞬間に思った不安の思いをマサに悟られたのかと、どきりとした。

言い終わらないうちに涙があふれてきた。

マサの手の温かさは発熱のためなのか、母親としての愛情なのか、敏男の心の中にあつたやるせない思いを、氷を解かすようにあたためた。

皿を洗いながら「かあさん、ごめんな」と背中越しに言おうとしたが、言葉にならなかった。蛇口から出る水をすくって、敏男は音を立てて顔を洗った。上半身を起こしたままテレビを見ていたマサの笑顔を見てから、敏男は風呂に入った。バラエティ番組の笑いがよほどおかしかったのか、マサは声を立てて笑っていた。風邪はもうすっかり治ったようだ。

(よかった)

外出できるようになったらまた和みやへ連れて行こう。あれこれ少しずつ並んだおかずを「どれから頂こうかしら」と目を輝かせる子供のような笑顔を見るために一緒に行こう。

一秒でも一分でもマサを疎んじる気持ちになった自分を愚かしいと思ひ恥じた。

あらゆることを考えて決心し覚悟を決めたマサの介護。敏男は自分のことよりマサの喜びと幸せを優先しよう、笑顔で暮らせるように努力しよう。それは、マサを満足させることであり、なにより敏男自身の満足につながるのだ。

全身を覆った泡を熱いシャワーで頭上から勢いよく流した。たくさん不安や惑いをきれいさっぱり流してしまいたい、消えて欲しいという、みそぎのようでもあった。

いつもより長い風呂だったが、着替えをすませて居間の方に目を向けると、テレビ画面はニュースに変わっていた。

マサは先ほどの体勢のまま画面を見ているようだった。

「寒くない？ 熱いお茶でもいれようか？」

声をかけて台所へ行きポットのスイッチを入れた。

マサの返事はない。

「眠くなった？ ふとんをかけようか？」

ニュースキャスターが、一週間後のクリスマスの町のようすを楽しそうに取材している音声が聞こえる。

テレビを見ながら眠ってしまったのか、やはり反応はない。

敏男は一瞬いやな予感がした。

いつもと何ら変わらないのに、マサの周りの空気が動いていないのではないかという気配がした。

寒すぎて吐く息が白く見えるような、冷やかな空気が居間を包んでいた。

「かあさん！」

敏男がマサの肩に手を置いた。マサは背もたれにもたれたまま、首を少し傾けて目を閉じていた。眠っているのかと思ったが、ゆるく開いた口の端から、つい今しがた食べたプリンがほんの少し垂れて出ていた。

「まさか」

急いでかかりつけの医院に電話をした。間もなく医師と看護師が出向いてくれた。

「亡くなっています」

医師が静かに告げた。

腕時計を見て看護師に死亡時間を記入させると、手を合わせて一礼をした。

死因は「心不全」あつけない最期だった。

別れの言葉も何の望みも言わずにマサは逝った。

看護師が死後の処置をして帰って行った後、敏男は何をどうしているのかわからないまま妻に電話をかけた。そして和みやへ電話を入れた。これまでのお札を言わなくてはという思いがあつた。

すぐに佐竹とママがやって来た。寝かせたマサの前でぼんやりとただ座っているだけの敏男に、葬儀はこの地区のやり方でいいかどうかを尋ねた。長年地元を離れていた敏男には心強く「よろしく頼む」と頭を下げた。

翌日、妻の浩子と亜美が来た。義母は足が悪く「申し訳ないけど、こちらの方から拜ませてもらいます。敏男さんにお悔やみを申し上げて」との伝言を聞いた。

マサに兄弟姉妹はなく、ひっそりとした葬儀だった。浩子や二人の孫はマサの死を悼み、涙を流した。

敏男は、あまりの突然のマサの死に気が動転していたのか、すぐには受け入れられなかった。慌ただしさの中で心は定まらなかった。

こぢんまりとした葬儀とはいえ、喪主が決めなければならないことや表に出なければいけないこともあり、悲しんでばかりはいられなかった。

火葬場で最期のお別れをして点火のスイッチを押した時、もう二度とマサに会えないという思いが胸を詰まらせた。唇を噛みしめ涙をこらえようとしたが、こらえきれなかった。

マサの長年の苦労や我慢に耐えたであろう一生を思うと、心がひりつくような、いたたまれない悲しみが襲った。

(親孝行できなくて許して下さい)

心の中で何度も同じ言葉を繰り返した。

寒空に薄い紫色とも水色とも見えるマサの煙が立ち昇った。煙が上空に消えてしまいうまで眺めていようと立っていた敏男の腕を浩子が組んできた。

「お母さん、最期の顔、満足そうだったね」

それだけを言うと敏男に腕を絡ませたまま同じように空を見上げた。

浩子の身体の温もりが腕を通して伝わり、敏男のそこだけが生きているようにも感じた。

二人は時間を忘れて立ち尽くしていた。

佐竹とママには言葉では言えないほど世話になった。

葬儀の仕方から通夜、葬儀当日と火葬のこと、ほとんど全ての段取りを手順よく進めてくれた。フライベートなことには一切踏み込まず、敏男と家族の手足となつて裏方を務め、助けてくれた。拓郎と亜美は、勤務や大学の都合で間もなく帰って行った。浩子は残つて葬儀の後片づけや近所への挨拶、費用の支払いなどを敏男と一緒にこなした。

「お母さんのもの、すぐには処分できないわね」

つい何日か前までマサが着ていたカーディガンやスラックスをタンスに入れながら言った。もう二度と着ないから、着る人がいなくなったからと早々に処分してしまうことは忍びなかった。まだマサの温もりがそこにあるような気がして「そうだね」と返事をした。

年寄りが亡くなったとたん、何もかも捨ててしまう若い人が多いという話を聞いたことがある。狭い住宅事情ではその気持ちがわからないでもないが、血を分けた者だけにしかわからない、死者の生き様や記憶や歴史が感じられて処分に踏み切れない思いがあるのも確かだった。

さつさと捨ててしまったら、と言わなかった妻の思いやりがうれしかった。

「いつかは処分しなくてはいけないのになあ」

敏男は独り言のようにぼつりと言った。

衣類や生活用品だけでなく、古びたこの家もその対象になる寂しさを感じて、居間や廊下や天井などを見渡した。

浩子は二週間ほどいた。

出しっ放しにしていた雑多なものは全て収納し、整然と片づけをして帰って行った。駅まで送った際に浩子が言った。

「いつかは、帰って来てね」

浩子は敏男に何を感じてそう言ったのか、どきりとした。

「ああ」

「かならずよ」そう言つて電車に乗った。

手を振っている顔が泣いているように見えた。絶対に帰ると言えなかった理由が何なのか、わからないまま見送った。

浩子が乗った電車はもうとつくに視界から消えていたのに、敏男はいつまでもホームに立っていた。

敏男の気持ちがよくよく落ち着いたのは、年が明けた一月の中旬も過ぎた頃だった。

佐竹とママには葬儀の後、礼は言ったが落ち着いて話はできていない。佐竹も気を遣っているのか誘いの電話もしてこない。

久しぶりに和みやへ出かけた。

遠慮気に入って行くと佐竹が定位置にいた。すれ違いに五、六人の客が出て行った。ママと女の子が手早くテーブルを片づけていた。

敏男は世話になった礼を言い、その後のことも報告した。

「ごぢんまりとしたいいい葬式だったじゃないか」

「お母さんは感謝しているわ。最期まで心をこめてお世話をしてあげて」

敏男は頭を下げた。

ママと女の子に飲み物を進めて敏男もビールを注文した。

「男なのによく見てあげられたなあ。感心するよ」

「肉親はボクだけです。それにママさんにも助けられました、昼ごはん」

「助けただなんて。でもうれしかったですよ。お母さんにおいしいと言っていただけで」

「いい親子だったよ。オレなんか一日一度はおふくろと口げんかしているもんな」

「そのたびにここで飲んでるんですよね、さたけさん」

女の子がからかうように言った。

「よめがいた頃はちよいちよいやきもちをやいてないなくなるとよめさんみたいに世話やきばあさんになるのよ。酒を飲みすぎるな、野菜をもっと食べろって、うるさくてかなわないよ」

佐竹はビールを一気に飲んだ。口舐めをしてお代わりのジョッキをママに差し出した。

「お母さんは佐竹さんがかわいいから小言を言うのよ。ほどほどにね」

「五十を過ぎたおっさんがかわいいか」

「いつまでたっても子供は子供、ねえ篠田さ……、あつごめんさい。お母さんのこと思い出させてしまった」

女の子は口をつぐんだ。

「いえ」

「でも篠田さんが前に言っていたこと、おふたりを見ていて思いました。お母さんは篠田さんのこと恨んでなんかいないと思いますよ。お父様のこと、起きてしまったことはどうしようもないのはわかっていたと思いますよ」

「不幸なことだけど、事故だったんだよ」

佐竹はうつむいたまま言った。

「お母さんはだれかのせいにすることで生きていく糧にしようと思っただんじやないかしら。幼い篠田さんと生きていくことの厳しさを乗り越えようと、気持ち奮い立たせるためにそう思おう

としたのじゃあないかしら」

「そうだよ。おまえを細胞からつくったおふくろだよ、ちりほども恨んでなんかいないよ」

「子供は母親の血や肉をもらって十カ月間お腹の中で育つよ。その分身を憎んだりするはずがない。お母さんの篠田さんを見る目でわかったわ。愛おしくてしようがない表情をしていたもの」

「だからな、オレンちみたいに口うるさいのよ。ほんと、まいるよ」

佐竹とママの言葉は敏男の胸に沁みた。

マサの告白にわだかまりを持ったまま過ぎ、マサの本心を聞かないままになってしまった今、マサの本当の思いはわからない。言葉通り敏男が夫を殺したと心底思っていたかもしれない。長年隠し通してきたことを認知の病が吐き出させてしまったのだろう。息子を他人だと思わずと脳にこびりついた思いが言葉となって出たのかもしれない。

敏男の心の中には死ぬまで忘れられない闇として残るだろう。けれどもそれを息子ではない他人として話したことで、マサの心のつかえもおりたのではないかという思いもした。

マサもどこかで安堵し、心が安らいだかもしれない。心が軽くなってあの世へ旅立ってくれたとしたら息子にとつては何よりうれしいことだ。

「苦しまずにさあ、大好きなプリンを食べて、おまえの声を聞きながら眠ったように逝くつて、最高の逝き方だけ」

佐竹は病院での妻の最期を思い出したのか、落ちそうになった涙をすすり上げた。

ママが黙って佐竹の前にティッシュの箱を置いた。

店内は静かになった。

ママの方針で、会話の邪魔になるとバックグラウンドミュージックもカラオケもない店内に、湯が沸く音だけがした。

だれも声をかけずそれぞれの思いに耽っていた。

敏男は母の家や家財を処分しようとは思わなかった。今はそう思っているても何年か経てばこのままというわけにはいかないことも承知していた。自分の原点であり育った場所、母との思い出のこの家をなくしてしまうことに抵抗があった。

もちろん家族と離れてひとりこの家に住み続けるつもりはない。ただ何カ月かに一度はここに来て家の手入れをし、佐竹やママと過ごす時間を持ちたいという思いがあった。

敏男が迷ったり戸惑ったり落ち込んだりした時にかすかな光りとなって助言をくれた二人と、縁が切れてしまう寂しさがあった。

懐かしい町の空気、玄関を入った時の実家の匂い、窓から差し込む太陽の暖かき、道端に咲

く名前も知らない野の花の何もかもが愛おしく、母につながっていた。

心の癒しとカリフレッシュという言葉では言い表せない穏やかな落ち着きがあった。マサとの同居がなかったらこんな思いになったかどうかはわからない。

環境が違う町に長く暮らし、仕事一筋に生きてきた。それはそれでよかったのだ。

だが……。

どこかに忘れてきた思いや気遣いさえなくしてしまった自分を人間らしい気持ちに戻してくれ
たこの町や友人。

五十歳を過ぎて原点を大切にしたい気持ちにさせてくれたこの町や友人を、手放したくはない。

この町は、これから老いていくボクを本来のボクがいく道筋へと導いてくれた地図のような気がしていた。

「戻ってこい」とは言わなかった佐竹。

「また一緒に飲もう」

と別れ際に手を握った。

「電車の中で食べて」

と具が入った大きなおむすびと卵焼きの弁当を駅まで届けてくれた和みやのママさん。

いつ帰ります、と約束はできないけれど、この町が大好きだから、この町の人のもっと好きだから、また来ます、いや来させて下さい。

小さな駅のホームで二人の姿が見えなくなるまで、ボクは手を振った。